Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-17

尼崎市・富松神社を核とした地域づくりの展開に関する一考察 ： 富松一寸豆祭を中心として

渡邊, 千央実
中桐, 祥子
山崎, 寿一

(Citation)
農村計画学会誌,31:255-260

(Issue Date)
2012-11-20

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003049

尼崎市・富松神社を核とした地域づくりの展開に関する一考察

富松一寸豆祭を中心として

Consideration of the process of development of regions based on Tomatsu shrine in Amagasaki-city

The case of Tomatsu Issun-Mame festival

渡邊千央実*　中桐祥子**　山崎寿一***

WATANABE Chiomi* NAKAGIRI Shoko** YAMAZAKI Juichi***

(*神戸大学大学院博士前期課程　**株式会社ザイマックス　***神戸大学大学院工学研究科教授・博士（工学))

(*Graduate school, Kobe University **XYMAX corporation ***Prof., Kobe University,Dr.Eng.)

Ⅰ　はじめに

1　研究の背景と目的

都市の中に残された農地は豊かな地域空間を形成する上で貴重な緑地空間である。しかし、高収益を生まない都市農地は都市的土地利用の予備軍であるともいえる。いかにその都市農地を活用・保全し、豊かで実りある地域空間を維持するかは現代におけるひとつの課題である。都市農地はかつての農村で都市化が進み、農地が宅地へと転用されることで形成された。そして面的でなく点的な宅地開発により都市内に農地が点在するかたちとなり、農家間の関係性も希薄になり農業自体が衰退していくという事態も起きていった。さらに宅地の増加による急激な人口増加によるコミュニティ問題も起きている。

本稿では、大阪梅田から電車で15分という大都市にありながら、地域内には農地・農家、神社さらに地縁ある旧住民、転入による新住民が混住し、神社を中心に地域の農地・農家・農業をうまく巻き込み地域づくりを行っている尼崎市東富松地区を対象とする。農的資源[注1)]の保全・活用をポイントとして地域づくりの検証を進め、地域コミュニティの展開につなげていく。対象地区内にある富松神社で毎年開催されている「富松一寸豆祭（以下、一寸豆祭）」における調査を中心に、①一寸豆祭の地域における存在意義を明らかにすること、②農的資源を把握し、その活用の実態を明らかにすること、③東富松地区の地域づくりにおける農的資源の役割、農的資源を介した地域コミュニティの展開・発展を明らかにすることを目的としている。

2　本研究の位置付け

既往研究として農村集落における地域資源の保全状況と住民主体の保全活動の実態把握から地域資源の維持・活用法について考察したもの[1)]が見られる。

筆者らは1999年から2012年に至るまで尼崎北部地域の農と住の共生に焦点をあて現地調査を行ってきた。時間軸で見た尼崎市における農的資源の分布とその活用実態（特に水路や民家等）を明らかにしたもの[2)]、都市内農的環境ストック（富松神社の空間的特徴：鎮守の森）の市民的活用を通した地域コミュニティの展開に関するもの[3)]などがある。本稿では先に山崎・内平による研究をふまえ、富松神社における一寸豆祭に焦点をあて、祭に赴き、現地調査を通し実証的に農的資源と地域づくりの関係を考察していく。都市において農的資源が保全・活用され、新旧住民を結びつけ、地域のコミュニティの広がりにおいて重要な役割を果たしていることを明確にすることに力点がある。

3　研究方法

山崎・内平による研究をふまえ、以下の様に研究を行った。

第19回(2010年5月15日)、第21回(2012年5月19日)富松一寸豆祭における現地調査と富松神社宮司(以下、宮司）へのヒアリングより一寸豆祭の実態を把握し、展開を検証した。

さらに一寸豆祭の検証結果、宮司、一寸豆栽培農家などへのヒアリングを通し、一寸豆・農地・神社など、農的資源の活用の実態を把握し、地域づくりへの関係性を考察し、地域コミュニティの展開を検証した。

氏子青年会の名簿を利用し、宮司と会員へのヒアリングをもとに、結成当時(1991年)から現在(2012年)までの構成員を新旧住民へ分類し、その構成比を検証することで、新旧住民間のコミュニティの関係性を分析した。

その他、富松神社における秋例大祭(2010年10月10日)、節分祭(2011年2月3日)の現地調査も補足的に行い、市民団体の活動の広がりを確認した。

以上の現地調査で得られた情報とその他、富松神社節分祭取材者用資料や「富松の社HP」から得られた情報をもとに図や表を作成しながら研究を進めた。

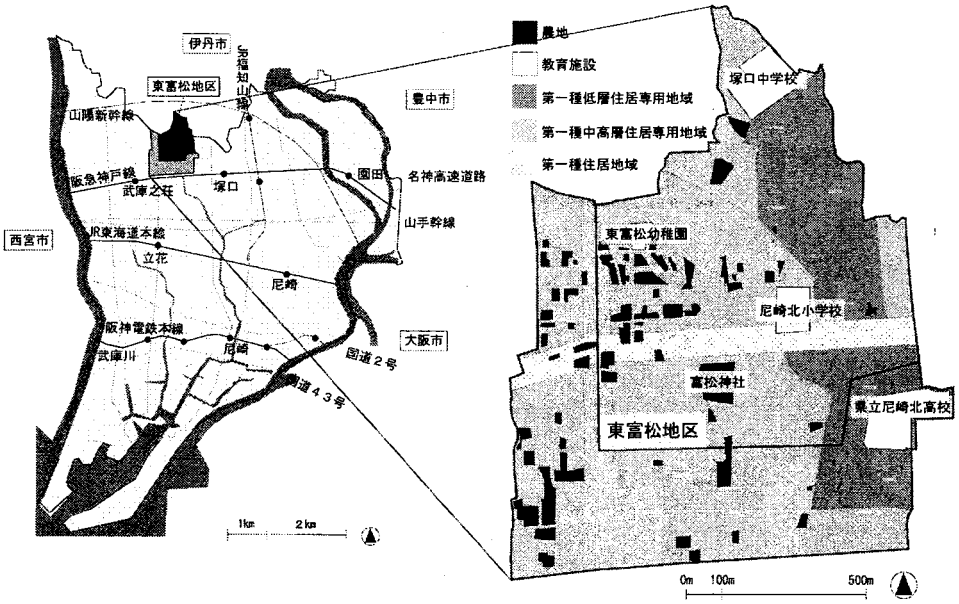

図１　調査対象位置図（尼崎市東富松地区）及び富松神社周辺(尼崎北小学校区)集落地図

Fig. 1 Whole map of Amagasaki and Village map around Tomatsu shrine

注：尼崎市都市計画概要図及び、航空写真より

Ⅱ　対象地区の概要

東富松地区は、大阪・神戸にも近い兵庫県尼崎市の北部に位置している(図１左)。尼崎市のほぼ全域が市街化区域である。南部は商工業の優れた地域であるが、北部に位置する当地区は(図１右)に示した通り、地域全体の9割は宅地である。しかし元来農地が広がる地域であり、現在でも宅地の間に田畑の緑が残る豊かな地域空間を形成している。

１　歴史

平安時代の荘園制度の頃には藤原摂家の荘園として富松荘が発展し、後に東富松村、西富松村に分離され戦国の歴史、農耕の歴史・文化とともに移り変わり、繁栄していった町である。

２　環境の変化

（１）尼崎市の社会的変化

戦後から高度経済成長期を経て1970年頃まで、様々な社会的要因によって尼崎市の人口は増加した。(図2)に示すように、外部からの転入による社会増がその割合の多くを占め、住居確保のため農地は宅地へと転用されたことが(図3)より読みとれる。

（２）尼崎市の農環境の変化（表1）

農地面積は1960年～2010年の間減少傾向にあり、特に1960年から1970年の10年間の間に半分以下となっている。また総農家数も1960年～2010年までの50年間で２割以下となっており、農地面積の減少と比例して農家数も減少し、農業自体が衰退の傾向にあることが伺える。

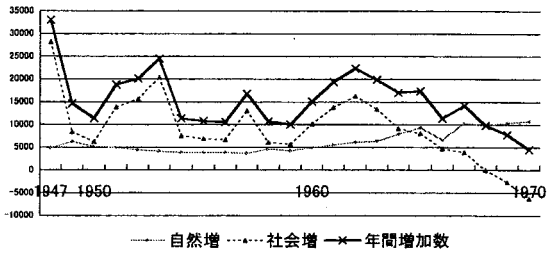

図２　尼崎市の人口動態

Fig. 2 Transition of population of Amagasaki-City

注：尼崎市 統計でみるあまがさき 2010より

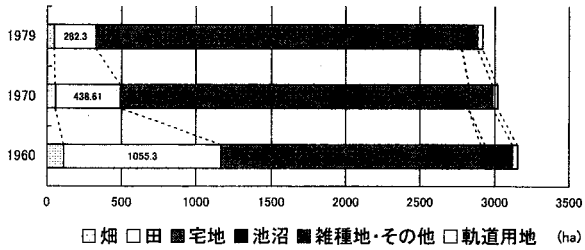

図３　尼崎市の地目別面積の推移

Fig. 3 Transition of agricultural area and land for housing in Amagasaki-City

注：尼崎市統計書（1960,1975,1985）より

表１　尼崎市内農家数と農地面積の推移

Table 1 Transition of number of farmers and area of farmland in Amagasaki-City

対象地		1960	1970	1980	1995	2005	2010
尼崎市	農地(ha)	1,165	493	239	91	87	103
	総農家数(戸)	2,330	1,411	952	606	433	334

注：尼崎市統計書（1960,1975,1985,1995,2005,2010）より

Ⅲ　富松一寸豆祭の展開

富松一寸豆祭は富松神社で行われ、地域の農家が共同で育てた東富松地区の伝統野菜「富松一寸豆」の収穫祭として1992年から年に1度開催されている。

1　祭の実態

（1）祭の概要

第21回富松一寸豆祭当日の境内の様子は(図4)の通りで、当日の朝収穫した一寸豆を参加者に販売し、豆を振る舞い、一寸豆の収穫を祝う。落語会、豆飛ばしコンテスト、模擬店などが催され、参加者を楽しませている。

（2）参加団体

一寸豆祭には企画・運営など祭の中心的な役割を担う「富松神社氏子青年会(以下、氏子青年会)」など様々な市民団体の参加が見られ、年を重ねる毎に参加団体数・催しもの数が増加傾向にあることがわかる（図5）。

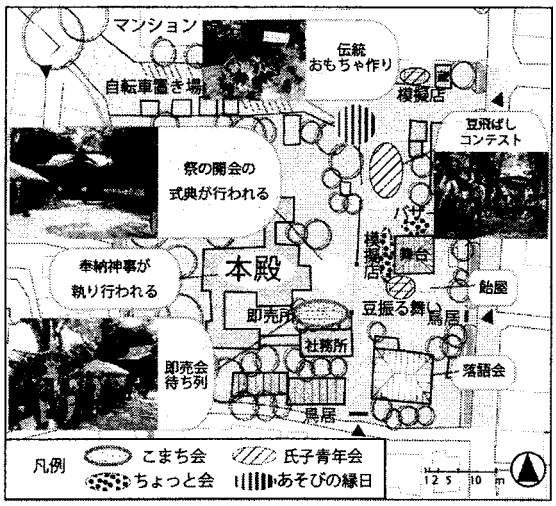

図4　富松一寸豆祭当日の空間分布

Fig.4 Spatial distribution on the day of the Issun-Mame festival

2　祭の展開

（1）祭の変遷

一寸豆祭は現在のように新住民や地域の子供が楽しみ、地域交流を生み出す祭となるまで徐々に変化してきた。1992年5月、当時農家の自家用としてのみ栽培されていた一寸豆を、伝統野菜として神社に奉納する事により始まった一寸豆祭は、奉納された一寸豆を調理して振る舞ったり、豆の袋詰めを配るだけであった。しかし、祭に多くの子供達が参加している事から、氏子青年会の発案により3年目から豆飛ばしコンテストといった子供達のための催し物を取り入れた。それにより、普段農業と関わりのない生活をしている子供も農業（農作物）と直接触れ合える機会が生まれた。子供達が遊びながら一寸豆に慣れ親しむことで、知らず知らずの内に一寸豆を地域の伝統野菜として意識し、愛着を持つような機会が得られたと考えられる。

（2）祭の波及効果　―一寸豆栽培の復活―

さらに5年目、販売用としての一寸豆栽培が復活した。農家からの奉納により始まった一寸豆祭だが、商品作物としての一寸豆栽培は途絶え、農家の自家用栽培にのみ頼った状態であり、さらに自家用栽培を行っている農家数も減少の一途を辿っていた。

そこで1997年に「富松一寸豆保存研究会(以下、保存研究会)」が結成され、一寸豆栽培の栽培研究が始まった。研究の末、栽培方法が確立し、一寸豆栽培が可能となった。そこで共同畑で栽培した一寸豆を祭時にお供えという形で奉納し、本来の一寸豆祭の意義に即した収穫祭としての祭へと変化した。

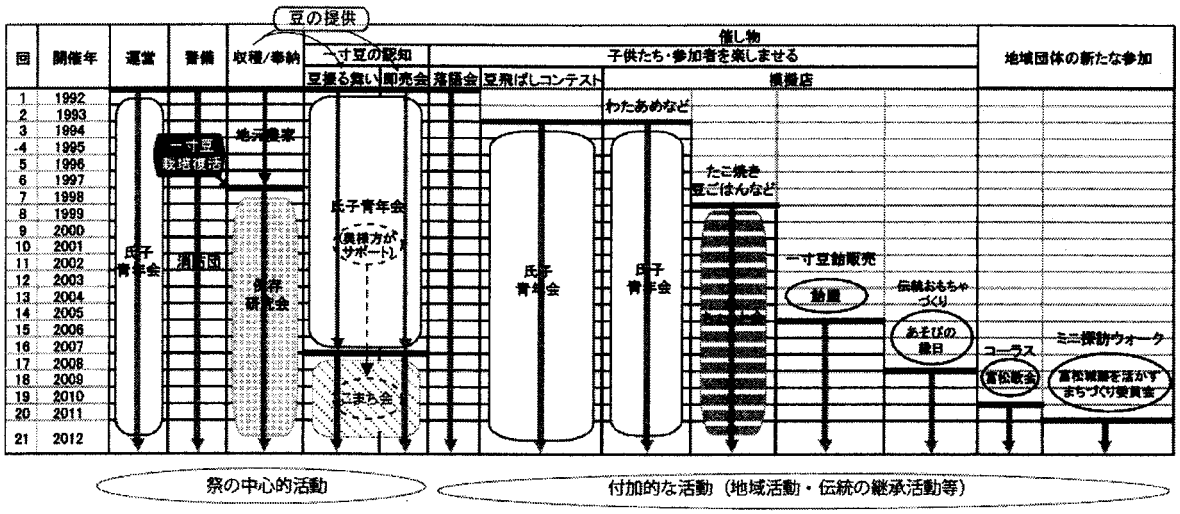

図5　祭の内容と参加団体の変遷

Fig. 5 the change of the participating organizations and contents in Issun-Mame festival.

3　富松一寸豆祭と一寸豆栽培における地域相関

一寸豆祭の特徴として、参加者である小学生が祭に欠かせない「一寸豆」の栽培を通じて、運営側でもある点がある。大人になり富松に戻り「一寸豆の畑を見ると昔収穫した事が懐かしい」、「また食べたい」という声が多く、大人になっても心に残っている事が伺える。単なる参加ではなく、運営側として地域と交わりながら祭・地域づくりに参加することで、子供達は楽しみながらも土地を愛する地域づくりの担い手のたまごとなっていく。

Ⅳ　地域づくりの基盤となる農的資源

1　富松神社

（1）概要

祭の開催場所である富松神社は、東富松地区に建つ神社で創祀は古く、天平５年（733 年）にさかのぼる。本殿は県指定重要文化財となっている。

（2）宮司

富松神社の善見宮司は東富松地区の地域づくりにおいて欠かせない人物である。氏神信仰という宮司の役割を全うするとともに東富松地区に留まらず、尼崎全体のまちづくり活動に精力的に参加している。また、善見宮司は地縁のある旧住民であり、かつてはPTAの役員でもあったなど、様々な顔をもつ。

（3）活動概要

富松神社で1994年当時に行われていた活動を (図6左)に示す。活動内容は神社活動と地域活動の大きく2つの軸があり活動により性質が異なる。白地にかかるほど地域活動の色が濃くなるがほとんどの活動が白地にかかっている。宮司の「地域の中での社会的な神社の役割」として神社を地域交流の場とする意図が盛り込まれている。

（4）活動の広がり

(図6右)は現在、富松神社で行われている活動を示している。1994年時点で実現されていなかった活動・組織が宮司の発案や働きかけにより創設され、その他様々な活動が展開されている。18年を経て、神社活動はほぼ変化していない一方で、地域活動は多岐に渡って波及しており、地域づくりが継続しながら発展していることが伺える。特に、子供達のために伝統のだんじりの復活や豆まきの実施、さらにさまざまな環境教育などが起こっていることは大きな特徴であり、子供達を通じて新旧住民間の交流機会も増加すると考える。また様々な活動が起こることで、住民・市民団体同士でさらに東富松地区の魅力を共有しあい、今以上に活動が活発になるという相乗効果によって地域活動が発展していると考える。

以下に新たに創設された代表的な団体をあげる。

1）富松ふるさと米・米クラブ（市民団体）

2009年に発足した団体である。宮司と同級生らが組織を構成し、地域内の休耕田を活用して米づくりを行っている。一寸豆同様、収穫時には子供達に農業体験の機会を提供するため富松幼稚園園児達と共同で収穫を行った。収穫した米はおにぎりにして食し、その他の収穫した米は祭時に販売し、新たな地域ブランド米として地産地消を推進している。一寸豆栽培を応用したこの取組みは、農地保全という点でも高く評価できる試みといえる。

2）富松城跡[注3)]を活かすまちづくり委員会

委員長を善見宮司が務め、富松城跡を単に貴重な文化財史跡として捉えるだけではなく、その魅力をまちづくりに活かし次世代を担う子供達に「時の物差し」「尼崎の宝」を引き継ごうと様々な活動を行い、今年度の一寸豆祭ではミニ探訪ウォークを行った。

（5）地域活動の特徴

東富松地区の地域づくりの特徴としては、次世代を見据え、子供達に幼少の時期に豊かな経験をしてもらうため、「子供達のための活動」が活発に行われている。そのひとつである環境教育では、旧住民農家と新住民の子供・親の関わる機会をも創出しており、一つの活動が重層的に様々な効果を生んでいる。

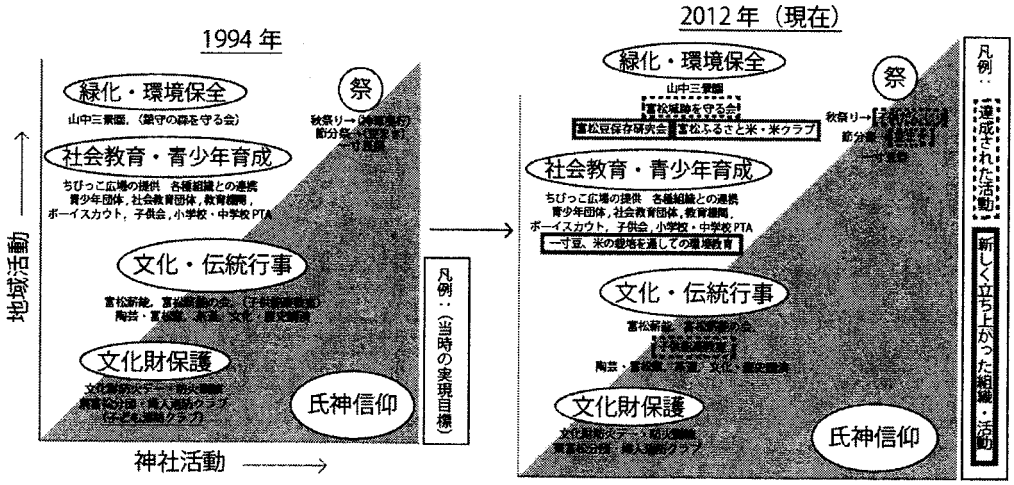

図６　富松神社の活動内容の変遷

Fig.6 Transition of activities of Tomatsu shrine

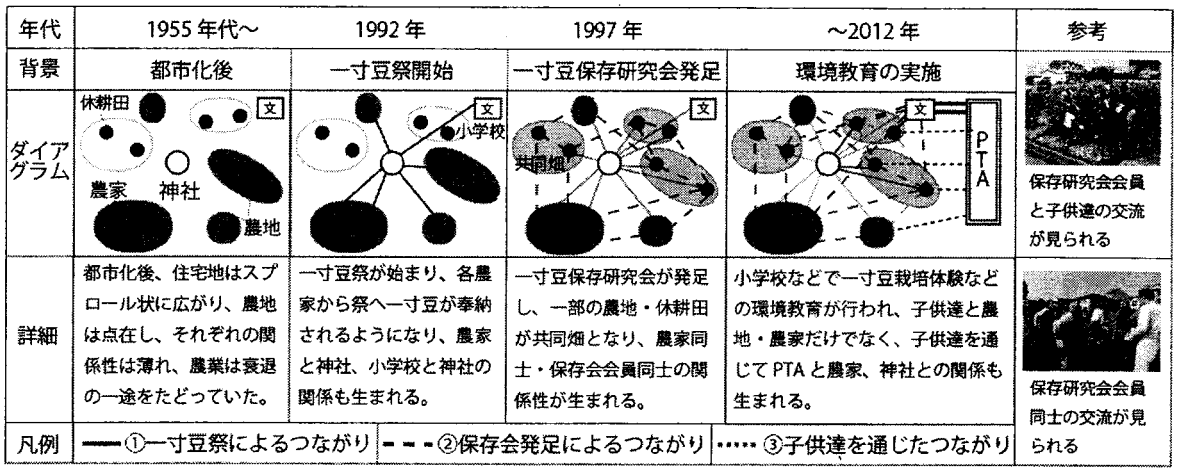

図７　農的資源を媒介にしたコミュニティの展開

Fig.7 Community development by the medium of Agricultural resources

２　富松一寸豆

（１）概要

稲作の裏作として尼崎市の北部の村々で昔から栽培され、特に富松で獲れる豆は粒が大きく柔らかで美味しいことから「富松一寸豆」と呼ばれ、その実は商品作物として明治から1960年頃まで多量に生産された。その後、栽培農家の減少により希少なものとなっていたが、一寸豆祭の旗揚げにより改めて脚光を浴びることとなる。

図８　一寸豆

Fig. 8 the photo of Issun- Mame

（２）一寸豆栽培による地域コミュニティの展開

1997年より一寸豆を安定して収穫するため地元農家や神社総代などで結成した保存研究会によって安定的な一寸豆栽培は復活した。会員へのヒアリングによって、その復活のプロセスを通し生まれた人的交流から、現在の地域コミュニティへの展開を検証した。(図7)に示したように①一寸豆祭開始により神社と農地・農家の関係性が生まれ始める。また②共同畑で栽培するため、一寸豆の管理・栽培は会員が交代で行い、会員同士の交流が活発になった。さらに③小学生には一寸豆栽培の体験学習の機会を設けたことで、共同畑で会員農家と小学生が交流し、さらに親とも知り合いになるといった、新旧住民間のコミュニティの発展が見られた。また、休耕田が共同畑になることで農地保全にも繋がっている。

Ⅴ　地域コミュニティの展開

１　氏子青年会に見る新旧住民間のコミュニティの展開

（１）氏子青年会の概要

一寸豆祭で主体的な運営を行い、新旧住民間・異世代間交流を目的に、子供のための「ふるさと思い出づくり」を進めている氏子青年会は、子供だんじりの復活のために組織され、節分祭では鬼に扮し小学校へ行くなど教育を意識した取り組みを行っている。

（２）氏子青年会会員の新旧住民比の変化

（図９）に示したように結成時は旧住民が100%を占めていたが、年々新住民の比率が増え、現在では半数以上を新住民が占め、欠かせない存在となっている。新規会員の開拓は小学校の行事など、子供同士や近所同士の付き合いがきっかけとなっており、新旧住民の交流の橋渡しの役割を担っているといえる。

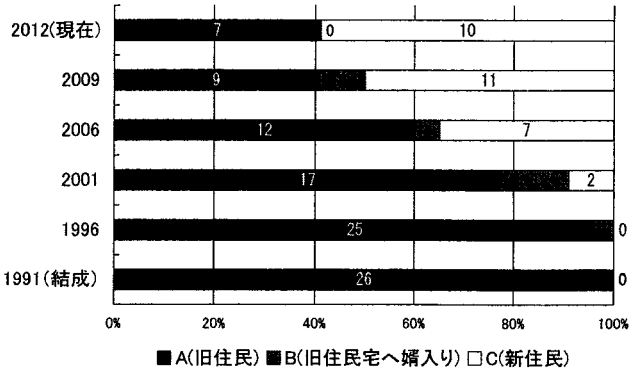

図９　氏子青年会会員の新旧住民比の変化

Fig. 9 the change of the proportion of newer to native in Ujiko Seinen-Kai.

（３）氏子青年会からの派生団体(図10)

氏子青年会の定年は45歳であり、定年後も何か「ちょっと」だけやりたいという人が集まり「富松ちょっと会」は1998年に結成され、女性も入会できる。また、青年会の奥様を中心にそれまで陰ながら支えていた女性達が、2007年に「こまち会」を結成し、子供を交えた自由な活動を行っている。青年会同様、新旧住民の交流促進の役

割を担っている。氏子青年会に関連する団体が一寸豆祭、秋祭りなどで中心的な役割を果たし、地域コミュニティの発展にも貢献していることが伺える。また、氏子青年会の会員はほぼ、地域の自警団である消防団に属しているという特徴も見られる。

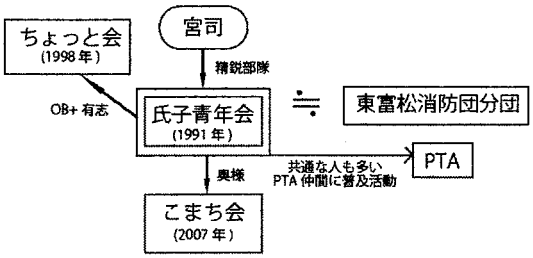

図１０　氏子青年会関連の団体

Fig.10 The organization around of Ujiko Seinen-Kai

Ⅵ　まとめ

①一寸豆祭の展開を検証することで、一寸豆祭がａ一寸豆栽培の復活に寄与したこと、ｂ市民団体の交流の場となっていること、ｃ子供の幼少期の色濃い思い出となること、ｄ一寸豆の周知に貢献したことが明らかになった。また、「(即売会の)列は年々長くなっている」という宮司の言葉からも、年々祭への参加者は増え、地域における一寸豆祭の存在は大きくなっていると考えられる。②一寸豆・農地・神社は一寸豆祭を構成する要素である。一寸豆祭、市民団体活動、また子供達への環境教育に関しても農的資源が設立のきっかけであったり、活動場所であるなど、様々な活用の実態があることが明らかになった。さらに③本地区の地域づくりにおいて、農地・神社・一寸豆は人々を繋ぐ媒介として中心的な役割を果たしていることが明らかになった（図７）。また、子供達は一寸豆の栽培・収穫を通して一寸豆祭に運営側として携わることで祭に対する思い入れ、さらには農地・農家・地域住民と関わることで、地域に愛着を抱きやすい環境がつくられ、次世代の地域づくりの担い手を育てる仕組みが示唆されている。現在、氏子青年会にとって会員の半数を占める新住民は欠かせない。地縁に頼らない会員の普及活動を行うことで、結成から年が経つごとに新旧住民に偏らない会員構成が実現した。さらに氏子青年会を例にとることで、新旧住民間の地域コミュニティの発展が他の市民団体の派生とともになされていることが明らかになった。

以上述べてきた団体・活動は何らかのかたちで富松神社・善見宮司と関わりを持ち、継続・発展してきた。神社・宮司という信頼ある場所・人物が地域づくりの核となることで東富松地区の地域づくりは円滑に発展してきたのではないだろうか。

注

注１）農的資源とは農地や農作物、神社などを指す。都市との対比を示すため「農的」という言葉を用いた。

注２）旧住民とは都市化以前から通世代居住を行っており、新住民とは都市化により転入してきた住民をいう。旧住民は元来農家が多いが、現在農家であるかは判断に寄与しない。

注３）東富松地区に存在する、平地の中世城郭の原形をとどめた堀と土塁の一部が現存する貴重な城館跡。富松神社が鎮守の森を担っていた。

参考文献

1)斉藤亮司ほか;農村地域における地域資源活用からみた住民参画の様態に関する研究 日本建築学会計画系論文集, 2002. 5

2)山崎寿一;都市のなかの集落空間と共生する 兵庫県尼崎市における農的環境資源を活かす「実験」, BIO-CITY 特集「都市と農村の結婚」コミュニティの再生と新しい農のかたち, ビオシティ, No. 17 , pp. 68-75, 1999

3) 内平隆之, 山崎寿一, 重村力 ; 都市内にある鎮守の森の市民的活用によるコミュニティ形成, 神戸大学大学院自然科学研究科紀要, 21-B, pp. 47-51, 2003

・山崎寿一; 19 章　都市の中で農業・自然体験型まちづくり,　高橋信正・金沢洋一, 「田舎のちから-人/資源/環境/交流」, 昭和堂, pp. 199-214, 2007

Summary : It is the research which clarifies validity in the community improvement of agricultural resources.
In the case of 'the Tomatsu Issunmame festival' in the Tomatsu Shrine in Amagasaki city,to grasp the implementation of the festival and to reveal of the factor of continuation of a community improvement ,to reveal the role of agricultural resources.

キーワード（Keywords）：農的資源（Agricultural resourde）, 地域づくり（Community development）, 都市（City）,

(2012年5月20日　受付)
(2012年9月16日　受理)